

---

# 帝王学園生徒会

鐘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝王学園生徒会

### 【Nコード】

N10220

### 【作者名】

鐘

### 【あらすじ】

魔法や魔術が普通の世界、5大学園の一つ、私立帝王中学校、そこで繰り広げられる、事件や戦い、主人公の神童蒼真は生徒会として色々な事件に介入していくのだった・・・戦闘力と学力がすべての世界の運命は？作者の気まぐれと勢いの駄作学園ファンタジー、よろしく願います。

## キャラクター設定（前書き）

作者「始まりました！よろしくお願いしますm - - m」

蒼真「駄文ですが・・・よろしくお願いしますm - - m」

作者「盛り上がっていいこうよ！」

蒼真「気分と勢い・・・」

作者「今回は主人公の設定です 世界設定などは次回になります」

蒼真「不定期更新ですが・・・よろしくお願いします。」

## キャラクター設定

### 〈キャラクター設定〉

#### 〈主人公〉

神童蒼真 13歳 男 B型 173cm 52kg  
瞳の色 紅色 髪の色 金髪 イメージ色 黒  
似ているアニメキャラ 上条当麻（とある魔術の禁書目録）  
一年三十組 私立帝王中学生徒会所属 役職 副会長  
学力 一年5000人中 第1位  
戦闘力 一年5000人中 第1位  
異名「天下無双」 十星王の異名「冥王刹那」

普段は、のんびり性格だが仕事になると冷静に戦況を把握し  
確実に仕事を成功させる、生徒会には優秀枠で入り  
主な仕事が戦闘系なので満足している  
天下を統べる十人、天下十星王の第2位でもある  
家族は蒼真以外死亡、ペットの鳥と暮らしている  
基本は刀と手甲で戦う、魔法も得意、アニメ大好き中学生

## キャラクター設定（後書き）

作者「凄く短いですが・・・今回は終わりです」

蒼真「短！」

作者「技や好きな物なんかは本編で・・・」

蒼真「この調子で大丈夫かねえ？」

作者「大丈夫さ！勢いあればw」

蒼真「まあ期待してる人なんか居ないと思うがな」

作者「気分と気まぐれだから・・・w」

蒼真「まあ頑張ってくれ」

作者「おう！」

次回 第零話 世界と始まりの音

## 第零話 世界と始まりの音（前書き）

作者「始めましたwプロローグ的な？」

蒼真「お前が疑問系でどうすんだよ！」

作者「とにかくw世界設定などな感じです」

蒼真「ダメな作者だ・・・まったく」

## 第零話 世界と始まりの音

魔法や魔術が当たり前のように存在する世界

天下十星王が統べる弱肉強食の世、学生も大人も実力がすべて  
5大学園が一つ、私立帝王中学・・・そこから始まる物語

「・・・まだ眠いな・・・」

ピカピカの中学生になってから一ヶ月・・・さすが5大中学とだけあつて忙しい

なんか優秀枠で生徒会に入っちまって・・・まあ楽しいけど  
え？本当で優秀なの？って？・・・まあ一応はな

「さて・・・屋上で寝るとしますかな」

ここアスカイド第一地区から帝王中は遠くない・・・まあ5分で着くかな

学校と言うより学園並みの広さの中学・・・迷子になっちまうぜ

「今日は確か風紀委員の演説？なんかあつたような気がする」

風紀委員・・・新撰組と名乗っている生徒の安全、風紀を乱す者を正すために頑張っている

風紀委員さんの活動のおかげで、俺の仕事も少し楽になっているのだが・・・

「さて・・・今日も働くかな」

蒼真の主な生徒会の仕事は侵入者駆除や学校の見回りである

特別推薦組 三十組は絶対に授業を受けなければいけないと言う事は無いので

・・・さぼっているのだ

く帝王中屋上く

「やっぱここで昼寝は定番だよな・・・マジで」

ああく睡魔様の降臨だ・・・おやすみです・・・

「生徒会副会長サボりなんて・・・恥ずかしい」

・・・何も聞こえない・・・邪魔者の声なんて

「風紀委員の演説ある・・・生徒会の参加する」

「・・・お前も入ったのか？新撰組とやらに」

「・・・うん、無音も入った・・・」

「そうか・・・」

斉藤無音 一年三十組 風紀委員所属予定



蒼真とは昔からの仲で、けっこう仲が良い・・・らしい

「そんな演説に参加する仕事は会長から聞いてねえぞ」  
「それでも普通は参加する・・・」

普通なのか？・・・世の中そういうもんなのか？

「めんどくせえから・・・却下だ」  
「蒼真に・・・来て欲しいな」

・・・断れない空気・・・しゃくはないな

「はあ・・・行くか」  
「・・・行こつ」

こうして・・・睡魔様をスルーし、仕事が増えるのであった・・・

## 第零話 世界と始まりの音（後書き）

作者「ヒロイン？登場！」

蒼真「だからさあ〜なんで疑問系？」

無音「私が・・・蒼真と・・・（／＼／＼）」

蒼真「あゝ本気にしてるよ〜」

無音「蒼真は・・・嫌なの？」

蒼真「（なんて答えればいいんだ！？）」

作者「まあそういう話は今度にして・・・それでは」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・・・m」

無音「評価や感想・・・待ってる」

蒼真「次回 第一話 正義と信念」

## 第一話 正義と信念（前書き）

作者「とっても眠いよ・・・」

蒼真「だったら寝ろよ」

作者「大丈夫さw今回は風紀委員の演説？だね」

蒼真「だから、なんで疑問系？」

作者「では、どうぞ」

## 第一話 正義と信念

風紀委員の演説・・・毎年恒例となっている新撰組の目標を語る時間みたいな感じである

とても優秀な生徒達・・・風紀委員の中の風紀委員とも言えるであろう

「おっ・・・あれが副長さんの・・・土方先輩か」

土方 鬼那<sup>きな</sup> 三年二十七組 新撰組副長

「我ら新撰組は正義の名の下に集い！悪を斬る者である！さあ！同志よ、ここに集え！」

そう言うのと10人位が土方先輩の下へ行った・・・やっぱり増えるのか

無音も入るらしいから・・・俺の仕事が減るように祈るかな

「蒼真・・・無音も行くね」

「ああ・・・まあ頑張れよ」

「・・・うんっ」

接近戦型武器を重視としている新撰組、刀を主体とした人が多く組に分かれて行動し、その活躍は他校でも噂になってるらしい

「ふざけてんじゃねえよ！」

出たよ・・・毎年恒例の新撰組反対派、そして毎年の如くボコボ

「にされるらしい  
って・・・俺の仕事かよ

「何が正義だよ・・・ふざけやがって、そんなもの壊してやるよ！」

大きな斧を構え突進していく、この学校に入る奴は大体が戦闘か  
勉強は出来る人達だ

大きな斧に魔力を纏わせ突進していく

「生徒が恒例行事の邪魔をするなよ・・・」

「お、お前は！？」

「生徒会副会長・・・神童蒼真、生徒の安全保護のため対象を気絶  
させる」

仕事になるとちゃんと切り替え、冷静に状況を把握し確実に仕事を  
成功させる

一年で副会長になるまでの実力があるから、この仕事も任された

「正拳裂破！」

ドゴオーン！

「ガハア！」

普通の正拳突きに見えるが、かなりの威力を誇り、鋼も粉砕する  
と言われている

蒼真は生徒保護のため気絶や軽傷までなら戦闘を許されている

「この程度で風紀委員に挑むなんてな・・・馬鹿が」  
「演説に来てくれたとはな・・・」

「久しぶりですね・・・土方副長さん」  
「ふっ・・・いつも通りでいいのだぞ？」

帝王中に入学して、風紀委員に勧誘された・・・その時以来だな、話すのは

「まあ連れて来られましてね・・・」

「ふっ・・・そうか、助かったぞ、感謝する」

礼儀正しく、先の反対派の事件のことに、お礼を言われる

「俺が居なくても・・・大丈夫だったでしょ？」

「ふっ・・・当然だ」

「んじゃ・・・俺は戻りますんで」

「うむ・・・今度手合わせ願いたいものだな」

こうして、毎年恒例の風紀委員の同士を集めるための演説は終わり  
毎年の如く、けっこんな数入隊した

「朝から忙しいな・・・まったくよ」

毎年恒例ではあるが・・・風紀委員の隊員の数が増えるのは良い  
のだが

反対派の数も増えてきてるらしい・・・忙しいな

「演説に行っていたらしいな・・・」

「仕事してきましたよ・・・帝会長<sup>みかど</sup>」

<sup>こくは</sup>黒覇帝 三年三十組 生徒会会長である

その190cm以上あるであろう巨体ながらの素早さと賢さも兼ね備える

天武の会長である

「聞いたか？・・・新撰組に珍しく男が入ったらしいぞ」  
「へえ・・・確かに珍しいですねえ」

あの土方さんが認めたと言うことは強い・・・ってことは仕事が減る！ヤッター！

「まあ俺には関係無いっすけどねえ」

「まあ何らかの事件があるやもしれん、一応注意だけしておいてくれ」

「了解・・・」

・・・と言い終わると会長の姿は、もう無かった  
さすがに速いな〜と感心しながらも昼寝をするのであった

「新撰組に・・・男・・・か」

## 第一話 正義と信念（後書き）

作者「終わりましたね〜第一話」

蒼真「新撰組って・・・男じゃないのか？」

作者「さあ！それは置いて、土方副長に男について話してもらいましょう」

土方「うむ・・・私はあまり認めてはいないが・・・局長が言ったのでな」

蒼真「土方先輩は認めてないんですか・・・」

土方「あの優しさは戦では死を呼ぶかもしれぬしな」

作者「おっと、このままじゃ完璧にキャラ設定分かってしまうので、ここまで」

蒼真「次回の、お楽しみってことか・・・」

作者「そういうことだ、それでは！」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・・・m」

土方「次回 第二話 一つ輝く刃」



## 第二話 一つ輝く刃（前書き）

作者「来ましたねえ・・・第二話」

蒼真「なかなか速いかもな・・・」

無音「出番・・・無いの」

作者「ヒロイン枠があるさ!？」

蒼真「だからさ・・・なんで疑問系？」

無音「蒼真と・・・はう（／／／）」

蒼真「あゝ完璧本気にしてるよ」

作者「今回は新撰組に入隊した男関係の話です」

蒼真「本編をどうぞ!」

## 第二話 一つ輝く刃

いつも通り屋上で昼寝をする蒼真

仕事の無い時は寝るか図書室で本を読むか・・・二つに一つ  
そんな蒼真の近くに忍び寄る影が・・・一つ

「おい・・・起きろ・・・授業サボりは禁止だぞ」  
「・・・誰だ？お前」

・・・三十組は、ある程度授業に参加しないでいいルールなんだが  
生徒会の仕事で学校見回りってことになってるし・・・

「俺は新撰組五番隊組長の北海道ほんとつ和貴かずきだ」  
「・・・新撰組・・・男か」

マジかよ・・・いきなりのエンカウト・・・面白いけど、めん  
どくさい展開だな

会長も注意しとけて言ってたしな・・・

「近藤の推薦でな・・・ははっ」  
「へえ・・・局長さんの推薦か・・・凄いんだな、お前」  
「まあ幼馴染だしな、実力は普通だ」

そういうことかよ・・・でもまあ、実力を見てみたいかも

「あ！そつだ・・・授業をさぼりすぎるなよ」  
「三十組だからな、大丈夫さ」  
「だからって・・・ほとんど出てないだろ？」

・・・バレてますねえ、はい

「生徒会の学校見回りの休憩中だ」

「お、お前！生徒会役員なのか！？」

知らなかったのかよ！・・・色々知ってるなと思ったが  
肝心なこと知らないとはな・・・面白い奴だ

「生徒会副会長 神童蒼真だ」

「・・・副会長はサボりつてのはな・・・」

「気にしたら負けだ」

「気にしないと負けな気もするがな・・・」

返されただど！？相手にスルーさせる技を・・・出来るな・・・  
こいつ

「新撰組ならやるべきことは・・・一つじゃないか？」

「・・・言葉で分からないなら・・・実力で・・・か」

新撰組はな・・・土方さんがルールを作ってるからな、戦闘が多  
いんだよな

まあそのおかげで仕事が減るのだから

「あんだ・・・強いのか？」

「自分の目で確かめてみたらどうだ？」

「なかなかの余裕っぷりだな」

蒼真はあれでも戦闘力一年1位の实力を誇っている  
十星王の一人でもある彼が負けることなど・・・ほとんど無いの  
である

「んじゃ・・・新撰組五番隊組長、北道和貴、参る！」

と刀を抜き構えた・・・悪くは無い・・・さすが組長さんだ

「天覇・装甲！」

和貴の刀が輝き、光輝く魔力を纏っている

「凄いな・・・かつこいいもんだ」

「一応鍛錬は欠かさない奴なんでな・・・」

油断大敵・・・俺もやるか、仕事じゃねえゝがな

「輝天地塔！」

地面から光輝く棒のような物が大量と出てきて、こちらに襲い掛かるが・・・

「旋風脚撃・・・」

横になぎ払うが如く振られた足の勢いで相殺された

蒼真は手足の鎧のような武器をつけ、基本はそれで戦うのがスタイルである

「さ、さすが副会長さんだけあるな・・・」

「空拳裂破！」

400m距離ならば相手の正拳裂破の少し弱い程の威力を当てる技和貴は回避できず・・・直撃してしまう

「グハア！・・・すげえゝ威力だ・・・」

「その程度か？」

「まだまだ！」

今のを耐えるか・・・まあ伊達に局長さんの推薦を貰ってないってことか

まあ・・・そろそろ終わらせるがな

「うおおおおお！」

薙ぎ主体の戦闘で攻めてくるが当たらない  
剣道をやっているのか、足運びが剣道っぽい感じである

「正拳裂破！」

「なっ！？」

蒼真の正拳裂破は直撃せず・・・寸止めされていた

「負けたか・・・強いな、蒼真は」

「お前も、まあまあだ・・・土方さんも出てきたらどうだ？」  
「なっ！？」

和貴は気づいてなかった見たいだな・・・  
ってことは土方さんの差し金かよ

「気づかれるとは思っていたが・・・本当に気づかれているとはな」

「土方さんの差し金ですか？」

「うむ・・・新しい組長に、世の中を教えてやったのだ」

俺じゃなくても・・・よくないっすかねえ

「ふ、副長、このことを知ってやったのか？」

「五月蠅い！近藤さんの推薦だからと言って、いい気になっているからだ！」

「いい気になった覚えは・・・無いけどな」

・・・なるホロ・・・仲がよろしく無いご様子で

新撰組での内乱は、やめてほしいな・・・

「うむ、協力感謝する・・・行くぞ！バ和貴<sup>カズキ</sup>5番隊組長！」

「バカじゃねえよ！」

・・・仲が良いのか？悪いのか？・・・わからん

## 第二話 一つ輝く刃（後書き）

作者「終わりました！第二話」

蒼真「あれは・・・仲が良いのか？」

無音「喧嘩するほど・・・仲が良い」

作者「うゝん・・・どうなんだろう？」

蒼真「お前が疑問系でどうすんだよ！」

無音「蒼真・・・毎回怒ってたら・・・疲れる」

蒼真「そうだな・・・」

作者「そついうこつた」

蒼真「・・・イライラしてきたぞ」

作者「すいません！・・・それでは！」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・・・m」

作者「次回 第三話 始動する妖しき者」

### 第三話 始動する妖しき者（前書き）

作者「始まりました〜第三話」

無音「題名からして・・・事件の予感」

蒼真「忙しいのは嫌だな」

作者「主人公がそれでどうすんだよ!」

無音「蒼真は・・・このキャラがいい（／＼／）」

蒼真「なんか一人で変な空気になってるぞ」

作者「まあ頑張りましたよ」

無音「本編・・・なの」



### 第三話 始動する妖しき者

「新撰組の時代は終わるのだ」

「そう！我ら妖刀軍の力によって・・・」

新撰組反対派は動き出す・・・

お互い新たな同士を集め・・・戦力を増やし・・・戦いが始まる

「今日も昼寝の時間だな」おやすみなさい」

我らが生徒会副会長 神童蒼真は、いつも通り昼寝の時間へ突入する予定だったのだが・・・

ド「オーン！」

「俺の昼寝の時間を返せ！」

事件の音と共に睡魔様をスルーし

生徒会の仕事を成功させるため・・・現場へ向かうのであった

「新撰組の時代は終わりだあ！」

「終わるのは・・・お前達・・・天突き！」

「グハアア！」

新撰組反対派が動き出し、校内での戦が始まった  
新撰組の数を上回り、数で攻める新撰組反対派

「無音ちゃん！大丈夫？」

「美虎こそ・・・ね」

新撰組組長隊も出動し、前線で戦っている  
予想以上の大きな戦となっている

「無音ちゃん達回避してねえ！白銀の礫！」

空から氷柱の如く氷が相手に降り注ぐ

新撰組は接近戦型ばかりでは無く、魔法専用隊もいるのである

「くっ！新撰組如きが！我ら妖刀軍に勝てると思うな！」

「妖刀・・・？」

妖刀？アニメとかに出てくる奴？・・・などと無音は考えていた

「死ねえええ！」

「っ！？・・・しまったなの」

不意に見せてしまった隙をつかれ、敵の攻撃を直撃・・・

「やらせねえよ・・・無音に傷つけたらな・・・重症じゃすまんぞ」

ガキーーーーン！

「戦闘で隙を見せたら、死亡フラグだぞ、無音」

「ありがとっ……なの、蒼真」

ギリギリセーフ……アニメの登場シーンみたいで、決まったな  
よな、俺

数は減ってるが……まだ多いな

「生徒会副会長、神童蒼真、新撰組に味方する！」

その一言で生徒達の士気の差は大きく逆転する  
最強の呼び声高い副会長が味方になれば、勝利はほぼ確実、生徒  
の士気は上がる

「妖刀が妖怪か知らんが……仕事だからな、退治じゃ！」

「た、たかが一人だ！やってしまええ！」

「雑魚が……天爆暴風！」

蒼真が地面を拳で突くと地面は割れ、地形も悪くなり  
妖刀軍の足場は最悪の状態になった

「今が好機！新撰組よ！力を見せつけてやるぞ」

土方副長の一言ではば全員が地形の変化に戸惑う妖刀軍に突撃  
先の接戦が嘘のように戦いは新撰組の圧倒的勝利で終わった……

「すまん……助かったぞ、神童副会長よ」

「いいですよ、仕事なんで」

「ありがと・・・蒼真」

怪我人も少なく、妖刀軍も重症者少なく、妖刀と言っぐらいの刀は出てなかったがな

・・・まだ残党がいるパターンか

「んじゃ・・・頑張れってくれよ」

「ふむ、またな」

↓ 1時間後 午後3時↓

北道と、その幼馴染 緋風 唯は各部活へ行く道を歩いていた

「和貴は忙しそうだね、新撰組に入って」

「まあ近藤からの誘いだしな、断るわけにはいかなかったし」

同じ一年十二組の二人、幼馴染で付き合いが良く

和貴は唯から勉強を教えてもらったりと良い仲だった

「んじゃ、また明日ね」

「ああ・・・そっちも頑張れよ」

和貴は剣道部 唯は吹奏楽部へと向かっていった

「ふっふふ・・・新撰組五番隊組長か・・・妖刀「底」の餌にしておやる」

和貴は気づかない・・・妖刀の魔の手が忍び寄ることを・・・

### 第三話 始動する妖しき者（後書き）

作者「第三話でした」

蒼真「俺、主人公なのか？」

無音「蒼真以外に主人公はいない」

作者「その通りさ！？」

蒼真「そこ疑問系はダメだろっ！」

無音「作者さんは馬鹿な勢いで書いてるから・・・把握できてない」

作者「その通りさ！」

蒼真「そこは疑問系じゃないんだな」

作者「次回は妖刀との対決ですな」

無音「誰も・・・期待してない」

蒼真「その通りだな」

作者「そんな・・・それでは」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・・・m」

作者「次回 第四話 闇夜に煌く一つの刃」



帝王学園風紀委員メンバー（前書き）

蒼真「第四話じゃないのか？」

作者「その前に新撰組メンバーの紹介を」

無音「無音も・・・でるの？」

作者「もちろんさ！」

蒼真「組長だけだろ？今回は」

作者「その通り」

無音「では・・・どうぞなの」



## 帝王学園風紀委員メンバー

〔私立帝王学園風紀委員メンバー〕

近藤威沙音<sup>こんどう いさね</sup> 女

15歳 A型 身長 165cm 体重 秘密

三年二組 髪の色 桃色 瞳の色 薄い青

私立帝王中学 風紀委員 新撰組組長

愛刀名 天舞・虎

学力 三年5200人中 第3970位 戦闘力 三年5200

人中 第1230位

桃色の長い髪で明るい性格、少し天然

明るく元気な雰囲気にお人よしの性格で新撰組の皆から慕われている

戦闘力・学力が特に優れているわけでは無いが、生徒をまとめる力  
士気を上げる力に優れており、戦の要となる人物である  
和貴とは幼馴染である

土方鬼那<sup>ひじかた きな</sup> 女

15歳 B型 身長 167cm 体重 秘密

三年二組 髪の色 紫色 瞳の色 赤色

私立帝王中学 風紀委員 新撰組副長

愛刀名 鬼斬り・滅

学力 三年5200人中 第1565位 戦闘力 三年5200

人中 第690位

黒髪のポニーテールで少し冷静だが戦闘だと燃えるタイプ  
組長以上に普段の新撰組をまとめている人物

普段は落ち着いているのだが、争いごととなると燃えるタイプ  
周りが見えなくなりこともある、戦闘力もなかなかで皆から頼ら  
れている

蒼真とは仲が良いのだが、和貴を嫌っている？

沖田美虎 おきた みこ 女

14歳 AB型 身長 153cm 体重 秘密

二年三十組 髪の色 黄色 瞳の色 薄い紅色

私立帝王中学 風紀委員 新撰組一番隊組長

愛刀名 天刀・心躍る大地

学力 二年5500人中 第3140位 戦闘力 二年5500  
人中 第97位

黄色い髪ショートで自分のことを僕と言う

普段はのんびり昼寝しているが新撰組最強と呼び声高く

沖田率いる一番隊は重要任務につくことが多い、戦闘では普段か  
ら見られる戦闘っぷりである

ペットの白猫のマロマロと行動していることが多い

蒼真とは昼寝仲間で和貴とも仲が良い

齊藤無音 さいとう むおん

13歳 AB型 身長 140cm 体重 覚えてない……

一年三十組 髪の色 薄い黄色 瞳の色 緑色

私立帝王中学 風紀委員 新撰組三番隊組長

愛刀名 天霸狼刀

学力 一年5000人中 第685位 戦闘力 一年5000人  
中 第102位

薄い黄色髪のショートで団子のようなツインをしているが帽子で  
見えない

蒼真以外の人とは、あまり話さず口数少なく、感情表現が上手く出来なく、何を考えているか不明

突破力と一撃の破壊力で三番隊組長になった、気配を消すのが得意技

巨大な帽子をかぶっていて、実はその帽子は召喚獣だったりする  
蒼真にのみ心を開き、蒼真が学園内で頼っている数少ない人物

帝王学園風紀委員メンバー（後書き）

作者「まあ今回は4人でした」

無音「・・・まだまだたくさんいる」

威沙音「初登場な気がするうゝ！やつぽ」

美虎「次回は四話だねえ」

蒼真「和貴は紹介しないのか？」

作者「次回の新撰組紹介で紹介するよ」

鬼那「ふむ！我らの活躍！期待してくれ」

作者「まあ妖刀編終わったら・・・生徒会だけでも」

蒼真「そっいえば出てないな・・・」

作者「出さなければ・・・それでは！」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・・・m」

美虎「次回こそが四話だよ」

#### 第四話 闇夜に煌く一つの刃（前書き）

作者「妖刀軍が本格的に動くね」

蒼真「生徒会と風紀委員が動くな」

無音「忙しい・・・の」

蒼真「昼寝の時間がああああ」

作者「さあ、今回は蒼真と無音の共同だ」

無音「夫婦の共同・・・」

蒼真「おい、変な勘違いがいるぞ」

作者「まあ、いつてみよう」

#### 第四話 闇夜に煌く一つの刃

新撰組と新撰組反対派の本格的な戦いが始まった  
蒼真と無音は妖刀軍と戦闘中

「多いな・・・まあ適当にやるぞ」

「うん・・・共同作業」

俺達は二人・・・まあ二人のほうがやりやすいがな・・・  
妖刀の持ち主とやらは不在の様子だな・・・

「無音！魂連鎖！」

「・・・うん」

魂連鎖

パートナーの契約をした者の二人が発動可能  
どちらかが魂の玉の状態になり、もう一人の体へ、魔力や身体能  
力を格段に上げ

魂化した人の意思もあるため、五感も優れる

「影暗鬼・天黒 壱ノ型 黒鎖」

影暗鬼・天黒

影と闇の魔力で作られた暗殺武器、殺傷能力が非常に高く  
魂連鎖の状態だと、殺傷能力、纏う闇の魔力が上がる

「な、なんだ？あれ？」

「黒鎖は相手を追尾する半円月型の鎌の刃を持つ武器だ」

「（・・・全滅）」

敵の数は・・・多いが、影暗鬼の使ったからには・・・ゲームオーバーだな

軽傷で済ませれるかな？

「行くぞ！影追い！」

ズバシユツ！バシユツ！

追尾式で飛んでいく黒鎖を回避できず切り裂かれていく

普通の武器で受け止めるのも無理・・・結果・・・勝つ術も無い  
つつーことだな

「闇風旋風！」

回転する黒鎖から闇の竜巻魔法を発動させる  
広範囲魔法だからな・・・まあ大半は終わりだろうな

「うおおおお！」

「ふっ・・・その程度の動きで！」

背後から襲い掛かる相手には裏拳、元々拳での戦闘も得意とする  
蒼真は

体に魔力を纏わせるのが得意で五感はとても鋭い

「（大きい魔力反応・・・ある）」

「・・・あれか・・・召喚獣かよ」

前方に仁王立ちの如く立っている・・・巨大な熊？

「グワアアア！」

「勢いは合格だが・・・裂威！」

相手の体の内部に魔力ダメージを与える一撃の正拳突き  
外部のダメージよりも・・・痛いんじゃないかな  
裂威の一撃で隙が出た・・・

「月影飛翔！」

黒鎖を投げ一閃・・・真つ二つになった・・・  
敵の全滅確認・・・お仕事終了・・・いざ！昼寝の時間へ！

「（他の隊の助太刀・・・行かないと）」  
「めんどくせえ・・・却下だ」

「副長の力見せてやろう！いくぞ！」

鬼那の一言で新撰組の士気は上昇  
反対派に数が劣っているものの実力差、幹部的存在が居るか居ないかで違う

「はあああああ！」



「つ、強ええええ！」

バシユツ！バシユツ！

鬼那の力と速さのある剣技で次々と反対派の奴らは戦闘不能にな  
っていく

副長の名は伊達ではない

「下校の時間もあるからな・・・終わらせるぞ！」

鬼那の一言で新撰組が一気に攻撃姿勢に・・・そして

「鬼斬り・一文字！」

紅色の魔力を纏う刀で一閃  
見た目以上の凄い威力である

「ふう・・・妖刀の持ち主は居ないな・・・」

「他の組は戦闘中か・・・五番隊は・・・どこらへん？」  
「・・・北海道貴・・・か？」

不意に後ろから・・・気配を感じなかったぞ

「えーつと・・・迷子？」

んなわけねえよな・・・俺に用事？部活か？

「新撰組は邪魔だ・・・妖刀の力を見せてやる」  
「っ!？」

妖刀・・・だと!？

#### 第四話 闇夜に煌く一つの刃（後書き）

作者「皆強いな・・・って感じの第四話でした」

蒼真「次回は一人目の妖刀使いか・・・」

無音「蒼真と・・・（／＼／＼）」

蒼真「何を想像してんのか！さっぱり分からん！」

作者「大丈夫だよ、無音、デートの話はあるから！？」

無音「よくやったの・・・」

蒼真「いやいや！何勝手に決めてんの！？」

作者「気にしたら負けだ！それでは」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございました」

作者「次回 第五話 妖刀「底」」

## 第五話 妖刀「底」(前書き)

作者「一本目の妖刀来ました!」

蒼真「名前からして強くなさそうな気が・・・」

無音「・・・実力底無し?」

作者「そう!底無し・・・って訳でもない」

蒼真「まあ和貴に期待しとくか」

作者「本編どうぞ!」

## 第五話 妖刀「底」

「（妖刀の持ち手か・・・やるか!）」

「ふっ・・・怖気づいたか？」

一気に攻めるか？様子を見るか？まあいつも通りだ！

「天覇・装甲!」

和貴の刀が光る魔力を纏い、和貴は突貫していく

「毒沼!」

相手が刀を地面に刺すと大きくは無いが、沼が現れた

「なっ?なんじゃこりゃ?」

「底無しの毒沼だ・・・」

「凄いヤバイ名前だな」

これ喰らったらゲームオーバーだな

・・・なら!

「光剣燕!」

和貴の頭上に光輝く刀が七本現れ相手に向かって飛んでいく  
和貴の数少ない長距離技である

「・・・毒針林」

地面から紫色の針が出てきて防ぎやがった・・・  
名前からして、また危ない技が出てきやがった・・・

「接近戦に持ち込むしかねえかな」

「やれるか？貴様に？」

・・・舐められたもんだよなあ、五番隊組長の力見せてやるか

「天覇・装甲！」

「なっ！？」

今回の天覇・装甲は刀に魔力を纏わすのではなく  
自身の体に光の魔力を纏わせる！

「行くぞ！」

ヒュン・・・

「なっ！？」

ほんの1〜2秒だった・・・30mぐらいに距離を一瞬でつめた  
のだ

普通の身体能力ならば無理だろう

「終わりだ！」

ズバッ！

反応が遅れた相手に一閃  
深くは入らなかったが・・・けっこうなダメージを与えた和貴

は思っていたが

「ふっ・・・この程度で・・・」

「・・・化け物かよ・・・こいつは」

傷が塞がり、さつきより元気な感じがするぞ

・・・妖刀の力ってか？

「毒蛇之牙！」

相手の体からドロドロの紫色の蛇みたいなのが突進してくる  
体から・・・気持ち悪いな

「輝天地塔！」

ドゴォーーン！

蛇をすべて消滅させ・・・？  
居ない・・・どこに消えた？

「・・・ここだよ」  
「なっ！？」

ズバッ！

背後からの突然の声に振り向いたら・・・斬られた  
あの間を一瞬で？どうやって移動しやがった？

「沼から出てきたのさ・・・お前の負けだ」  
「くっ・・・本気で化け物かよ」

沼から出てきたって・・・河童かよ？

・・・ん？河童は川だったわけ？・・・どうでもいいわ！

「・・・周囲に人の気配無し・・・やるか？」  
「はっ・・・今更何をするってんだ？」

・・・周囲に人が居ると巻き込むからな・・・今なら使えそうだな  
俺の刀の解放をな・・・

「無限輝光・・・解放！」

和貴が、その言葉を言った瞬間  
和貴の持つ刀が光輝き多くの光となって天へ向かった直後  
流星の如く光の刀が降り注ぐ

「無限一光流・・・いざ！」  
「なんだ？この数の刀は？」  
「光燕！」

近くにある刀を一本持ち、近くに刺さっている5本の刀を相手目  
掛けて飛ばす

すべての刀が武器である力が無限一光流である

「グハア！」  
「流星落とし！」



和貴が飛ばす刀の攻撃に反応しきれず喰らってしまい隙が出来たところに

和貴が3本の近くに刺さる刀を上空に飛ばし・・・それが相手に落下

「くっ！・・・毒蛇之牙！」

「双刀ノ盾」

和貴が自分の目の前に打ち上げた刀が回転し魔方陣を描いて盾になった

毒蛇之牙は防がれたが・・・また消えたのだ

「死ねえええ！」

「同じ技が通用すると思うなよ！光の舞！」

和貴が左手で持っていた刀で防ぎ、その刀を手放し近くにある刀を持ち

舞うように相手に刺していく、無限のようにある光の刀が次々と刺さっていく

「ガ・・・ハアッ！」

20本ほど刺さったとことで倒れたか・・・

パチンッ！

和貴が指を鳴らすと光の刀がすべて消えて一本の刀に戻った

「はぁ・・・はぁ・・・疲れたな」

こうして一人目の妖刀使いとの戦いは新撰組の勝ちで終わったのだ

## 第五話 妖刀「底」(後書き)

作者「一人目撃破だね」

無音「出番無かった・・・の」

蒼真「和貴けっこう強いな・・・」

作者「さすが新撰組の男だね・・・」

無音「・・・無音、模擬戦で勝った」

蒼真「・・・さすが無音だな」

作者「和貴君・・・一気にイメージダウンだね・・・それでは！」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm - - m」

蒼真「次回 第六話 とある昼の食堂戦争」

## 第六話 とある昼の食堂戦争（前書き）

作者「妖刀の持ち主倒したね」

無音「和貴・・・よくやったの」

蒼真「色々調べさせてもらったしな」

無音「あんま分からなかった・・・けどね」

作者「後何人いるのやら・・・」

蒼真「先が長いな・・・」

作者「ガンバ！本編をどうぞ」

## 第六話 とある昼の食堂戦争

妖刀の一人目を倒し色々調べて分かった事がある  
・・・後9人程居るらしい

「先が長いな・・・」

「・・・頑張るの」

今の状況を言うത്？・・・

二人して屋上で昼寝でございませけども・・・

「今日の昼は幻のパンが来るぞ」

「まだ死にたくないの」

そう・・・半年に一回、幻のパンと呼ばれるパンが限定10000  
個発売する

値段は2000円、かなりの生徒が争う時間だ

「逝ってらっしゃい・・・」

「字が違うような気がするが・・・」

「気にしたら・・・負けなの」

よし！逝ってくるか！あつ！違う・・・  
行ってくるか！！いざ！出撃だ

ピンポンパンピンポン

「ただいまより〱幻のパン・・・を発売します！時間は10分間・・・スタート！」

その放送と同時に

ゴゴゴゴ・・・

「せ、世界が揺れている？」

こ、これが噂の食堂戦争？凄まじいな・・・  
だが・・・俺は負けん！生徒会副会長の力見せてやる！

「くっ・・・なんて数だ？」

食堂はかなりの数の生徒で埋め尽くされている  
・・・アメフト部とか相撲部とかのガードが硬いな・・・

「蒼真副会長！突貫します！ウオオオオ！」

くっ！これしきの数で・・・俺を止められると思うなよ！  
・・・人がゴミのようだ・・・

「金を渡して・・・ゲット！」

や、やった・・・勝ったぞ戦争に  
・・・美味しいのか？

「おい！そのパンを持っている奴！」

・・・俺か？

「なんですか？・・・二年生が用ですか？」  
「そのパンを賭けて勝負だ！」

・・・まだ戦争は終わっていないのか・・・

「行くぞ！」

「正拳裂破！」

バゴン！

「・・・クソ」

よし、今度こそ・・・！？  
生徒が向かってくる？パン狙いか？

「空拳裂破！」

バゴォーーン！

・・・人がゴミのようだ・・・脱出！

「やったぞ無音・・・戦争に勝ったんだ」

・・・脱出に成功し、屋上に帰還成功  
美味しいのか？2000円も使ったんだ、美味いはず・・・

「・・・ジー」

「・・・どうした無音」

無音が可愛い目でこちらを見ている

どうしますか？

- 1、パンをあげる
- 2、パンをあげる
- 3、パンをあげる

・・・待て！待て！

どれを選んでもパンが無くなるぞ



「パン・・・美味しそうなの」

「くっ！さすがの無音でもあげるとは・・・」

けっこう頑張った

いつもなら昼寝出来る時間を使ってパンを買いに行ったんだ

「・・・ジー」

「・・・無音食べたいなら買いに行けばよかっただろ？」

「怪我したくない・・・」

・・・どうすりゃいいんだ？

「蒼真・・・食べたいの」

くっ・・・可愛い目に負けるわけにはいかん！

半年に一回のイベントを・・・

「食べたいの・・・」

蒼真の目の前まで来て座る

そして見つめられ・・・

「グハア！」

勝者 齊藤無音 勝因 上目遣い

「モフモフ・・・おいしいの」

「俺の金と努力・・・」

一瞬にして金と努力の結晶が無となったのだ  
まあ無音が幸せそうだし・・・いいかな

そのころゝ風紀委員・新撰組室

「ありがとう和貴君！」

「ごくろうじゃバ和貴よ」

「和貴君ありがとう」

新撰組の雑用となっていたのだ・・・

「金が・・・」

## 第六話 とある昼の食堂戦争（後書き）

作者「戦争だったねえ」

蒼真「金と努力が……」

無音「……ありがと、おいしかったの」

作者「蒼真は、いい男だ！」

蒼真「まあ……いいかな」

無音「優しいの……さすが」

作者「うむ、それでは！」

蒼真「駄文ですが……ありがとございました」

作者「次回 第七話 武神への階段」

## 第七話 武神への階段（前書き）

作者「もうすぐテスト・・・w」

蒼真「まあ頑張れ」

作者「更新遅れましたm - - m」

無音「誰も・・・期待してないの」

蒼真「その通りだな」

作者「うう・・・本編をどうぞ」

## 第七話 武神への階段

妖刀軍・・・なんとか一人は倒せたが、妖刀を持つてる中で一番弱い奴らしい

けっこう全力だった・・・まだ足りない・・・実力が・・・頼ってみるかな・・・

「なあゝ副会長さんよ」

「なんだ？バ和貴？」

「副長と同じ呼び方するなっ！」

副長が変な呼び名をつけたから・・・皆から変な呼び名で・・・強いと言って思い浮かぶ人は、この人だからな・・・

「何の用だ？俺は昼寝で忙しいんだ」

「俺を鍛え「断る！」まだ全部言ってねえよ！」

即答却下・・・悲しいな、諦めるな！和貴！

新撰組五番隊組長の力を見せるんだ！

「そこを頼む！」

「・・・めんどくさい」

「生徒会は生徒の悩みを解決してくれるんだろ！？」

「本人の気分しだい・・・」

・・・これが帝王学園生徒会副会長かよ・・・  
こんな発言しちゃっていいの？生徒の味方だろ？

「鍛えてください、生徒会副会長様」

必殺！土下座！

「はぁ・・・そこまでやんのかよ」

「ここまでやるんだ」

「だが断る！」

「何故だぁぁぁ！」

この展開とセリフ的に完璧だったたる！

そこまでやって断るなんて・・・さすが副会長だ・・・Lvが違  
うな

「冗談だ・・・」

「まったく冗談に聞こえなかったのだが・・・」

やったぞ！・・・鍛えてくれるのか・・・

強くなつて見せる・・・が、素晴らしい特訓が待っていそうで怖  
いな・・・

・・・第一の特訓・・・いきなり模擬戦・・・  
本気でこないと鍛えないだそうだ・・・本気<sup>マジ</sup>かよ  
まあ・・・やるしか無いか！

「無限一光流・・・無限輝光・解放！」

数多くの光の刃が雨のように降り注ぐ・・・和貴の武器である

「いくぞ！光の舞！」

「・・・紅蓮落刃！」

一瞬で和貴の頭上に移動し赤い色の魔力を纏った足でのかかと落とし・・・

ドゴォー――ン！

「くっ！光燕！」

「空拳裂破！」

くっ！全部弾かれたのかよ・・・なんて攻撃範囲だ

「乱激風斬！！」

「うわぁっ！」

蹴りから放たれる斬撃？くそ！防ぐのに精一杯だぞ・・・  
隙も見当たらない・・・動きもギリギリ見えるぐらいだ・・・

「出直して来い・・・獅子王殺！」

「ガハア！・・・」

隙をつかれて凄まじい一撃を受け・・・和貴戦闘不能・・・

「明日から特訓だ・・・遅刻は許さん・・・」

こうして・・・特訓が決まったのであった・・・



## 第七話 武神への階段（後書き）

作者「第七話でした」

蒼真「・・・俺主人公？」

作者「そうだけど・・・」

蒼真「そう見えない感じがするんだが・・・」

無音「気のせい・・・のような気がするの」

蒼真「そうなのか？・・・」

作者「そうだと・・・それでは！」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・・・m」

作者「次回 第八話 鬼と光と最強と」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1022o/>

---

帝王学園生徒会

2010年10月16日15時58分発行